

(PDF版・2の3のア)『教会教義学 神の言葉Ⅱ／4 教会の宣教』「二十二節 教会の委託——二 教義学の問題としての純粋な教え」

(文責・豊田忠義)

「二十二節 教会の委託——二 教義学の問題としての純粋な教え」 (56-76頁)

「二 教義学の問題としての純粋な教え」

「**積義神学**〔**聖書神学**〕と**実践神学**の真中のところで発生する」ところの、教会の宣教における一つの補助的機能（「**教會的なく補助的奉仕**>」）としての「〔**教会**〕**教義学**の特別な課題」について、「人は両方の側に向かって気づいていなければならない」。何故ならば、「**聖書神学**〔**積義神学**〕においては**教会の宣教の<基礎づけ>**が問われ〔キリスト教の宣教は「<どこから>語らなければならないのか」、「**聖書ノ意味**」を問う問いが問われ〕、**実践神学**においては**教会の宣教の<形式>**が問われ〔キリスト教の宣教は「<どのように>語らなければならないのか」、「**聖書ノ使用**」を問う問いが問われ〕、「〔**教会**〕**教義学**においては、一方から他方に向かっての移り行きの中で、**教会の宣教の<内容>**が問われる限り〔キリスト教の宣教は<何>について語らなければならないのか、「**聖書ノ内容**」を問う問いが問われる限り〕、**換言すれば**〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な〕**教会の宣教の内容**と〔**教会に宣教を義務づけている**〕ところの、第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする第二の形態の神の言葉である「**啓示との<間接的同一性>**」において現存している〕**聖書に証されている啓示の内容との一致**が問われる限り、まさに〔**教会**〕**教義学**こそが、そこでの中央を形造っている**神学**は、「**啓示ないし和解の实在**」そのものとしての第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とするその最初の直接的な第一の「**啓示ないし和解**」の「**概念の实在**」（「**啓示のしるし**」）としての第二の形態の神の言葉である「**啓示との<間接的同一性>**〔**区別を包括した同一性**〕」において現存している「**啓示証言としての聖書**」、また、その聖書を自らの思惟と語りと行動にける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準とした（聖書を媒介・反復することを通した）第三の形態の神の言葉である**教会の<客観的な>信仰告白および教義**（Credo）としての「**これまで**にできた〔**教会の<客観的な>**〕**信仰告白および教会のこれまでの認識**の中でなされてきた**聖書についての証言**〔「**啓示のしるし**」の「**しるし**」〕を自分の背後にしつつ、その**宣教**の中で行動している**教会**を自分の前に持ちつつ、「**まさに教義学**の中でこそ**独自性**をもった**学問**として自分を見出し・展開させ・形成させて行くことができる」からである。

「今から見てそう遠い昔のことではない」時の「**教義学**」は、「**学問的な神学**」として、「**どう取り組んでよいのか分からない全く当惑した事柄**として受け取られた時代」において、「**神学**は、……**学問的な自覚**も持たず、むしろ**苦心惨憺**して、**先ず第**

一に哲学のところで、それから特に歴史学のところで〔あるいは「心理学等」のところで〕、自分を養ってもらわなければならなし、自分を養うことができると考えた」。言い換えれば、人間学との混合神学として、自然神学の段階で停滞と循環を繰り返せばよいと考えた。すなわち、その時代においては、「**釈義神学は教会史の中で、実践神学は多かれ少なかれ恣意的に選ばれ・与えられる技術的な助言の収集の中で、それぞれ解消されそうになり、それら両者が少しばかりの心理学的思弁によって……結びつけられたりあるいは結びつけられなかったりした**」。教会の宣教における一つの補助的機能（「**教會的なく補助的奉仕>**」）としての「**〔教会〕教義学が、本格的なものであり、それと共にそもそも神学が本格的なものであるということ**」は、「**〔教会〕教義学は、自覚しつつ、首尾一貫して、〔前段で述べた〕あの場所と枠の中に自分を置くということと共に立ちもすれば倒れもする**」。「そこからして、神学は、釈義神学と実践神学のただこっそり手に入れただけでない本当の自覚が存在する」し、「一般歴史学に相對しての教会史〔「キリスト教に固有な」類の時間累積、歴史性〕の独立性も理解される」し、「そのほかの学問によって自分に向けられた学問性に関する問いに対して、〔自立した〕精神の安らぎをもって相對して立つことができる」。このような訳で、「人は、……〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会の宣教における一つの補助的機能（「**教會的なく補助的奉仕>**」）としての〕神学を、〔「**教会に宣教を義務づけている**」ところの、第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする第二の形態の神の言葉である「啓示との<間接的同一性>」において現存している〕聖書と〔聖書を媒介・反復することを通じた、第三の形態の神の言葉である全く人間的な〕教会〔の宣教〕の真中に位置づけることによってだけ、それらすべては可能であるということについて思い違いをしてはならない。「単なる知識」と「認識」（信仰の認識としての神認識、啓示認識・啓示信仰、人間的主観に実現された神の恵みの出来事）を區別して、バルトは、次のように述べている——「啓示ないし和解の實在」そのものとしての起源的な第一の形態の「**神の言葉が人間によって信じられる……出来事**」、「**信仰の出来事**」は、徹頭徹尾われわれ「人間自身の業ではなく」、その言葉自身の出来事の自己運動を持っている起源的な第一の形態の「**神の言葉自身に基づいてのみ可能である**」。言い換えれば、神のその都度の自由な恵みの神的決断による、客観的なイエス・キリストにおける「**啓示の出来事**」と、その「**啓示の出来事**」の中での主観的側面としての「**復活され高擧されたイエス・キリストから降下し注がれる霊である**」「**聖霊の注ぎ**」による「**信仰の出来事**」に基づいてのみ可能である。すなわち、「**言葉を与える主は、同時に信仰を与える主である**」。したがって、起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身によって直接的に唯一回的特別に召され任命されたその人間性と共に神性を賦与され装備された預言者および使徒たちのその最初の直接的な第一の「**イエス・キリストについての言葉、証言、宣教、説教**」としての第二の形態の神の言葉

である「聖書の中で証しされているところの、〔第三の形態の神の言葉である〕教会の宣教の課題である〔起源的な第一の形態の神の言葉である〕啓示の宣べ伝えを目指すことのない〔自然神学の段階における〕単なる知識としての形而上学的な教義学は、それがどんなに考え深い才知豊かな、また首尾一貫した仕方のものであっても、その教義学は教義学としては<非>学問的である」、と。

さて、第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会の宣教における一つの補助的機能（「教會的なく補助的奉仕>」）としての教義学を営む「人間が、〔積義神学と実践神学の〕あの真中のところで、実際に事柄と取り組んで事柄の下にいる代わりに自分一人だけである限り、人間こそがあの真中のところで自分の生を生き尽くす者である限り、そこでは確かに〔その人間の自主性、自己主張、自己表現、自己義認の欲求という〕不幸が出来事となって起こってくるであろう。換言すれば〔第二の形態の神の言葉である〕聖書の生と〔その聖書を媒介・反復することを通して第三の形態の神の言葉である〕教会の生に対し同じように疎い思弁が場所を占めるであろう」。したがって、「人は、**教義学者として、自分に向かって、絶えず、……自分の行為全体をもって事柄のところにいるよりも**〔聖書を媒介・反復することを通して、絶えず繰り返す、純粋な教えとしてのキリストにあっての神、キリストの福音を尋ね求める

「神への愛」と、「神への愛」を根拠とした「神の讚美」としての「隣人愛」という連関と循環において、イエス・キリストをのみ主・頭とするイエス・キリストの活ける「ヒトツノ、聖ナル、公同ノ教会」共同性を目指す自分の行為全体をもって事柄のところにいるよりも〕、**実は自分自身**〔自分自身の自主性、自己主張、自己表現、自己義認の欲求〕とだけいるのではないかと問わなければならない。「まさにそのところでこそ、さらに」、第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会の宣教における一つの補助的機能（「教會的なく補助的奉仕>」）としての「教義学が、〔第二の形態の神の言葉である〕聖書から〔第三の形態の神の言葉である教会の宣教における〕説教へと通り抜けることによって」、それ故に「本来的な、人間的な思索を通り抜けることによって」、積義神学と実践神学の真中にある「教義学において、……神学と<哲学>の関係が焦眉の急を告げる問題となる機会を意味している」。すなわち、そこでは、「神学は、注釈的に思惟し語るのではなく、……また実践的に思惟し語ってもいない」ところで、その「移行に際しての批判と整理」について、人間学の一部門である「哲学が、神学に教えようと助けを申し出てくるのである」、逆に言えば〔まさに自然神学者としての、ハイデッガー自身から揶揄・批判された前期ハイデッガーの哲学原理に助けを求めたブルトマンのように、あるいはヘーゲルの歴史哲学に助けを求めたモルトマンのように〕神学が哲学に助けを申し出るのである。そこでは、「昔から、疎遠な諸力の侵入が起こり、聖書に対しても教会に対してもひそかに対立している形而上学が神学の中に混入してくることが起こり、聖書と教会を互いに引き離し、それらの侵入や混入が教義学に対して先ずある種の偽りの自主独立性を与

えた後に、〔それ故に聖書を自らの思惟と語りと行動における原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準としないが故に、〕教義学を、それと共に神学を、内的に解消させ、それから間もなくまた外的にも解消させたのである。したがって、「もう一度、われわれは、差し当たって先ずここに、〔神学と人間学との混合神学、自然神学、自然的な信仰・神学・教会の宣教への〕危険の源泉が存在しているということを確認しなければならない」。イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、その「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉、起源的な第一の形態の神の言葉自身の出来事の自己運動、その〈総体的構造〉における聖霊自身の業である「啓示されてあること」——すなわち、三位一体の唯一の啓示の類比としての神の言葉の实在の出来事である、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）に連帯し連続し、その秩序性における第二の形態の神の言葉である聖書を、自らの思惟と語りと行動における原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準として、終末論的限界の下でのその途上性で、絶えず繰り返し、聖書に対する他律的服従とそのことへの決断と態度という自律的服従との全体性において、聖書に聞き教えられることを通して教えるという仕方、純粋な教えとしてのキリストにあつての神、キリストの福音を尋ね求める「神への愛」と、そのような「神への愛」を根拠とした「神の讃美」としての「隣人愛」という連関と循環において、イエス・キリストをのみ主・頭とするイエス・キリストの活ける「ヒトツノ、聖ナル、共同ノ教会」を共同性を目指すベクトルを持つ「思惟図式」を堅持しなければならない。あの「危険の源泉」にある教義学における思惟図式は、「まさに……聖書の言葉に照らして、裁かれなければならない」。したがって、「人間的な思惟が遂行しなければならない批判と整理を停止させてしまうことが問題ではあり得ない」。したがってまた、バルトは、次のように述べている——「われわれが哲学的用語をつかうという事実にもかかわらず、神学は哲学的試みが終わるところから始まる」。何故ならば、神学も哲学と同じように人間の自由な自己意識・理性・思惟の類的機能を使つての知的営為ではあるが、第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会の宣教における一つの補助的機能（「教會的な〈補助的奉仕〉」）としての神学は、イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、その「啓示自身が啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉を、その〈総体的構造〉における起源的な第一の形態の神の言葉自身の出来事の自己運動を持っているのであるから、「方法論的には、ほかの学問のもとで何も学ぶことはない」からである。したがって、「哲学、歴史学、心理学等は、この神学的問題領域のどれにおいても、事実上、教会の自己疎外の増大以外のなものにも役立ちはしなかった」。「神についての教会の語りの墮落と荒廃以外の何ものにも役立ちしなかった」。また、その時、「哲学は哲学であることをやめ、歴史学は歴史学であることをやめる」、「キリスト教哲学

は、それが哲学であったなら、それはキリスト教的ではなかった。それがキリスト教的であったなら、それは哲学ではなかった」、と。

第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会の宣教における一つの補助的機能（「教会的な＜補助的奉仕＞」）としての「**教義学の一般的な課題**」について言えば、「**教義学的作業の前提**」も、イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、その「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の＜総体的構造＞、起源的な第一の形態の言葉自身の出来事の自己運動、その＜総体的構造＞の中での「存在的なラチオ性」としての聖霊自身の業である「啓示されてあること」——すなわち、三位一体の唯一の啓示の類比としての神の言葉の實在の出来事である、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）における「啓示ないし和解の實在」そのものとしての起源的な第一の形態の「**神の言葉を＜聞くこと＞**」、**具体的には第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とするその最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の實在」としての第二の形態の神の言葉である「啓示との＜間接的同一性＞**」において現存している「**聖書の中でなされているその証し〔「啓示のしるし」〕を聞くこと**」、絶えず繰り返し聖書に聞き教えられることを通して教えるという仕方で聞くこと、「しかも、〔絶えず繰り返し、第二の形態の神の言葉である聖書を媒介・反復することを通した第三の形態の神の言葉である〕**教会の宣教の中で〔起源的な第一の形態の〕神の言葉を聞くこと以外の仕方では始まることはできない**」という点にある、また第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会の宣教およびその一つの補助的機能としての神学における思惟と語りと行動が、「キリスト教的語りの正しい内容の認識として祝福され、きよめられたものであるか、それとも怠惰な思弁でしかないかということ、＜神ご自身の決定事項＞であって、われわれ人間の決定事項ではない」のであるから、**第二の形態の神の言葉である「聖書への絶対的信頼に基づいて**」（『説教の本質と実際』）、**聖書を自らの思惟と語りと行動における原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準とした（聖書を媒介・反復することを通した）第三の形態の神の言葉である全く人間的な「教会の宣教における言葉」が、「ただ単に人間の言葉であるだけでなく」、その言葉自身の出来事の自己運動を持っている起源的な第一の形態の「神ご自身の言葉であるであろうという期待と主張から出発している」という点にある。「この前提なしには、教義学的作業は、〔第二の形態の神の言葉である聖書を媒介・反復することを通した第三の形態の神の言葉である〕教会の宣教に対して何も言うべきものを持たないであろうし、教義学的作業が立てなければならない問い、教義学的作業がしなければならない批判、教義学的作業が与えなければならない提案は、根も葉もない、対象のない、内容のないものであるだろう**。「〔教会〕教義学が思惟し語る場所は、〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な〕教会の外部ではなく、教会の内部である」から、第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会の宣教

における一つの補助的機能（「教会的なく補助的奉仕>」）としての「教義学は、教会に与えられた約束を無視しつつ語るのではなく、むしろ〔第二の形態の神の言葉である「聖書への絶対的信頼に基づいて」、聖書を自らの思惟と語りと行動における原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準として、〕教会に与えられた約束を承認しつつ思惟し語るのである」。このような訳で、第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会の宣教における一つの補助的機能（「教会的なく補助的奉仕>」）としての「教義学の態度」は、「教会の宣教に相対して……批判的な態度でなければならない」としても、「しかし、それは、決して懐疑的——否定的な態度であってはならないのである」。それは、第二の形態の神の言葉である聖書を自らの思惟と語りと行動における原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準として、「的確に批判し、訂正して行く」態度でなければならない。何故ならば、イエス・キリストにおける啓示自身が、「啓示ないし和解の实在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉自身が、その啓示に固有な自己証明能力を、その言葉自身の出来事の自己運動を持っているからである。

「そのような訳で、〔第二の形態の神の言葉である聖書を媒介・反復することを通した第三の形態の神の言葉である教会の〕教義学」は、「[あのような仕方]で] 純粋な教えを、したがってただ単に人間の言葉だけでなく、また神の言葉を聞くことを考慮に入れることによって聞くであろう」、第二の形態の神の言葉である聖書を媒介・反復することを通した第三の形態の神の言葉である「教会の説教を、人がそれを〔神のその都度の自由な恵みの神的決断による客観的なイエス・キリストにおける「啓示の出来事」と、その「啓示の出来事」の中での主観的側面としてのキリストの霊である「聖霊の注ぎ」による「信仰の出来事」に基づいた〕信仰の中で聞かなければならないような仕方でも聞くであろう」。「この意味で、〔教会〕教義学は、その都度の現在の教会が〔それぞれの時代における、その時代と現実に強いられたところで、教会が〕、その生の表現の範囲全体にわたって、神について語らなければならないことを、……まさにその前提の下でこそ<批判的に>聞くであろう」。第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会の宣教における一つの補助的機能（「教会的なく補助的奉仕>」）としての「**教義学の一般的な課題**」について言えば、「**教義学的作業のもう一つ別の前提**」は、「そこで神について語る者は人間であり、そこで起こるところのことにおいては、〔第二の形態の神の言葉を媒介・反復することを通した第三の形態の神の言葉である〕教会の奉仕が、換言すれば……それとして、〔起源的な第一の形態の〕神の言葉そのもののように完全で、論難の余地のないものではなく、むしろ神の言葉をそのものを通して、（その人間的側面から見て）〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な「教会が罪人の教会であることが確かである限り」、〕教会の祈りと作業のもとで、それが常に新しく現にあるところのものとならなければならない教会の典礼〔洗礼と聖餐〕が問題であるということである」。